

連載 48

仕事について考える

札幌大谷大学社会学部
教授 平岡祥孝

年度末・

年度当初は人事異動の時期ですね。

退職や退任される方々とお別れすることはやはり一抹の淋しさを感じるものです。定年や任期満了で退職や退任される方であれば、「長年お世話になりました」「本当にお疲れ様でした」「時々はお顔を見せてください」などの挨拶が、何のわだかまりもなく口について出てくるものです。

しかしながら、筆者のささやかな職業人生にあっても、心からお見送りできない場合が少なからずありました。またこれからもあるでしょう。その典型的な退職は、組織への不満が原因となる場合ではないでしょうか。具体的に挙げるとすれば、仕事上の不満、人事上の不満、はたまた職場の人間関係のもつれ等々でしょうね。優秀な人材や中核的な人材は有形の報酬もさることながら、やはり無形の報酬を大切にしているように思います。それゆえ、彼らが経営方針や運営方針に異論を唱えた場合には、冷静沈着な対応が必要です。もちろん組織が一度決定したこ

とに従うことは、組織人として当然のことです。また、ただ単に何にでも反対はあり得ないことです。けれども、少なくとも組織構成員の過半数以上の支持が欲しいところです。一般常識の感覚で「これはおかしいですよ」「何か勘違いしていませんか」「どう考えても納得できません」「今までまったく説明がなかったではありませんか」「再考の余地はないのでしょうか」等々の意見が噴出するならば、危険水域。

そのような状況にあつては、管理職・経営職は立ち止まって考える必要があります。いつもながらの筆者の独断と偏見ですが、人は理屈では理解しても、心で納得しないと、動かないのではないのでしょうか。だからこそ、経営職・管理職は意を尽くした丁寧な説明と、情熱を伴った誠実な説得をしなければなりません。部下に各々のワークモチベーションを引き出させるためにも、そして職場のモラルを高めるためにも、それらの説明と説得は必要不可欠です。

「これは決定事項だ」「上司の命令に逆らうのか」「君たちの意見は通らないんだ」等々、一方的な最後通牒まがいの発言は、結果的に殺伐とした職場を作り出してしまふ恐れがあります。ましてや「この方針に不満があるなら辞めてもらって結構」などの恫喝は禁句で

す。これで将来を嘱望されている優秀な若手や中堅から辞表が提出されるならば、組織にとって大きな痛手となります。さらに彼らに人望があつて、後輩から敬愛され、同僚から信頼されている人物ならば、より問題は深刻化します。反発が組織全体に拡大しますから。

ここでどうしてもダグラス・マクレガーのX・Y理論を思い出してしまします。X理論は「階層の原則」であつて、権限行使に基づく命令・統制を組織づくりの中心原則としています。他方、Y理論は「統合の原則」であつて、組織構成員の成長欲求や自己実現欲求が充足できる組織づくりを中心にすすめています。言い換えれば、前者は「北風」、後者は「太陽」とでも言えましょうか。

組織の目標達成に個人を動員するのであれば、権限至上主義では行き詰ること必定。上司は部下の自発性や自主性を尊重して、真摯に向き合い対話することが何より肝要です。



【ひらおか・よしゆき】札幌大谷大学社会学部教授。英国の酪農経営ならびに牛乳・乳製品の流通や消費を研究分野としている。女子学生の就職支援やインターンシップ事業に携わってきた経験から、男女共同参画、ワーク・ライフ・バランス、仕事論、生涯教育などのテーマを中心に、講演やメディアでも活躍。

ARTS



ちびっこギャラリー

しらかほ保育園
にじ組のみんな

子どもたちが大好きな「まめうし君」の絵本を題材に、卒園記念にみんなで作った4月からのかしんダーです。下絵からはみ出さないように真剣に水彩絵の具で描きました。なかなか上手にできたよ！！



雪かき

でヘトヘトだという声が聞こえてきますが、近年にないほどの雪に見舞われ浦幌町にも大雪警報・注意報が立て続けに発せられました。

例年の3倍とも言われているだけに、担当課は日々除雪排雪との戦いです。

小学生からの「太陽への手紙」や中学生から冬のイベント開催について要望が出ていましたが、地域おこし協力隊や若者の実行委員会が立ち上がり、第1回目の「しゃっこいナイト in 浦幌」が開催されました。

前日は大雪でしたが、アイスクャンドルからドラム缶のロデオ、滑り台、雪山の宝探しなどが繰り広げられ、中学生考案のベジニョッキを提供する屋台も設置されるなど、イベントを盛り上げるために費やした労力は多大なものがありました。少ない予算で多彩なアイデアが詰まっております。雪の中で子どもたちのあふれるばかりの笑顔が弾んでいました。

1回目としては大成功を収めたのではないかと思います。

女性連の60周年事業でもある「第39回あいフェスティ」では札幌交響楽団のコンサートマスターである大平まゆみさんが「生の音楽の素晴らしさ」と題してコンサートを開いてくれました。

バッハの「ガボット」など10曲の演奏とともに、フロアーに降りて製作されてから300年たつていてというバイオリンの名器を間近かに見せていただきながら誰もが知っている唱歌の演奏で、会場からは自然に合唱が生まれ、皆さんが音楽に酔いしれた素晴らしいコンサートでした。

このような機会を提供した女性連、また大平さんと呼ぶことを提案された町民の方に感謝申し上げます。日本創生が政権の目玉です。このたび地方創生フォーラム「地方が変わる、日本が変わる」と題して全国9箇所で開催されましたが、北海道では帯広市で開かれました。

開催の次の日、その主催者でもある石破創生担当大臣の伊藤補佐官が、子どもたちと昼食を一緒にしながら「うらほろスタイル」を視察したい

とのたつての希望で浦幌まで来られました。

ただ、当日は大雪で全校休校となつてしまったため、子どもたちと会う機会は実現しませんでした。関係者と「うら弁」を食しながら歓談され、「うらほろスタイル」の取り組みを真剣に聞いておりました。

「うらほろスタイル」の取り組みが地方創生につながると思いが強い事も発言され、そのためにわざわざ浦幌まで足を運んでということでした。

「うらほろスタイル」の取り組みは足元の浦幌ではなかなか皆さんに浸透していかないきらいがありますが、文科省の報告書で「コミュニティスクール及び地方創生の好事例」として、紹介されるなど全国的には「うらほろスタイル推進地域協議会」は著名な存在です。

次の週には「うらほろフォーラム2015」も開催され、120名以上の参加者で会場はあふれましたが、「うらほろスタイル推進事業」にも共鳴していただいている、全国的にも地域おこしで有名な徳

島県神山町、島根県海士町、岐阜県可児市から地域おこしの先導的役割を担っている方々が来町されて先進事例の紹介がありました。

これだけの先駆者が集結する事はめったにないことであり、上川の東神楽町から町長や東川町の職員も講演を聴きに来られておりましたが、モニターツアーとして「うらほろスタイル」に関心がある東京・札幌などからも9名が参加されました。

ただ、町民の皆様の参加が思ったほどなかったことが少々残念でした。

「うらほろスタイル推進事業」は「地域への愛着を育む事業」「子どもの思い実現事業」「農山漁村つながり事業」「若者のしごと創造事業」からなつていますが、いずれも子どもを中心に据え「子どもが変われば、大人が変わる、地域が変わる」を合言葉に進めています。町民の皆様により理解を深めていただくことが必要に感じました。

浦幌町長 水澤一廣